

〔講演訳〕

## ガストン・ミロン、ケベック詩と〈静かな革命〉<sup>1)</sup>

ピエール・ヌヴェー

真田桂子 [訳]

今日、私が皆さんにお話しするのは、ケベックの現代詩を決定づけ、ほとんど伝説にまでなった詩人についてです。その情熱的な人柄や行動力や彼の残した優れた作品から、彼はすでに生前から伝説的あるいは神話的な人物でした。1996年の死後も、彼の栄光は色あせることはありませんでした。私は、このガストン・ミロンという詩人についてお話しながら、同時に1960年前後の、ケベックにおいて詩と歴史がきわめて緊密に結びついた時代についてお話したいと思います。すなわちそれは集団的なアイデンティティや民族的な文化を主張し、ミロンをはじめケベックのカナダからの独立をめざし、政治的な自治を確立しようと人々が立ち上がった時代でありました。しかしおそらくご存知の通り、知識人や文化人がこぞって支持したにもかかわらずこの計画は頓挫し、今後も実現する見通しは立っていません。

とりわけ2017年の現在において、ガストン・ミロンを、あるいはケベック詩を、静かな革命を再検討するという事は、詩と歴史が切り結ぶ難解な関係について問いかけることになるでしょう。ケベックで1960年前後に起きた「静かな革命」と呼ばれる変革において、詩のもつ力の二つの側面が顕在化し結集することになりました。その一つは、現実をあるがままに証言する力であり、もう一つは、まだ起きてはいないことを予言する力でした。おそらくガストン・ミロンの詩ほど、この二重の側面を真摯に担い、詩の役割を普遍的な域に高めたものはないでしょう。

\* \* \*

ケベックの歴史を語る上で避けては通れない「静かな革命」とは一体、どのようなものだったのでしょうか？そして詩はそこで、なぜかくも大きな役割を担うことになったのでしょうか？最も客観的に見れば、これは革命というより、ケベック社会の大きな改革を意味しました。それは政治的、社会的な制度改革であり、教育、医療、文化、経済のあらゆる分野に及び、一方でそれまで教育や医療の分野を取り仕切っていたカトリック教会の影響力は著しく衰退していきました。多くのケベコワは、旧首相であったモーリス・デュプレシスという伝説的な人物に象徴される「大暗黒時代」と呼ばれる保守的な時代を経て、この社会的、政治的な改革が起こり近代的なケベック社会が生み出されたと今日まで信じています。この「大暗黒時代」とは、権威主義的で保守的なカトリック聖職者たちによって支配され、保守主義や政治的腐敗が蔓延し、組合の結成や、規範的な考え方から逸脱した前衛的な芸術家たちを抑圧しようとした時代でした。そして「大暗黒時代」から、人々は進歩と自由と明晰さに目覚めていったというある種の神話ができあがっていきました。これはある意味で、過去からの決別と新しい時代とアイデンティティの到来を予告する「建国神話」だったと言えるでしょう。

しかし広くとりわけ1980年代から、何人もの歴史家や知識人がこの神話を批判するようになりました。少なくとも1960年の前後で、ケベックが一気に大きな断絶を経験したという考え方には距離をおくようになりました。「大暗黒時代」のイメージはあまりにも極端で、実際にはケベックは1960年以前からかなり近代化が進んでいたと考えるようになりました。女性の選挙権の獲得や、義務教育の制度化、初

めての電力会社イドロ・ケベックの設立など、それらの政策はすべて第二次世界大戦の最中、1940年から44年頃に日の目をみえています。2011年に出た共編著である『引き継がれた静かな革命』<sup>2)</sup>は、まさに1945年から1960年の間にこそ「静かな革命」を用意した社会的、経済的な発展の契機があったことを明らかにしています。

この分析はまた、文学とガストン・ミロンの道のりにも当てはまると言えるでしょう。詩の分野においてシュールレアリスムが現れたのも1940年代前半でした。またその頃、画家や芸術家のなかに様々な転覆や反抗がきざし、1948年には創作活動の十全な自由を求めた「完全拒否」が標榜されました。1951年に、ミロンの友人でもあり親しい協力者ともなった詩人ロラン・ジゲールは、「大いなる手が僕たちにのしかかり／大いなる手が僕たちを地面に押しつぶした」と声を上げ、情け容赦のない死刑執行人を具現する「この大きな手はいままさに腐敗して／私たちは立ち上がり新たに歩み出すだろう」<sup>3)</sup>と謳いました。この死刑執行人とは一体何者なのでしょう？カトリックの聖職者でしょうか？それともモーリス・デュブレシスに具現された政治権力をさすのでしょうか？おそらくそれはもっと漠然とした、とりわけ知識人や芸術家たちの間で共有されていた意識を詩的に表現したものに他ならないでしょう。すなわちフランス系カナダ社会がこれまで抑圧され、無力感にさいなまれ、なすがままになっていた支配の元凶であり、そこからの束縛を断ち切らなければならないと感じていたものを表していたのでしょう。

ガストン・ミロンの歩んだ道のりをたどるとき、ミロン自身の変化のなかに、1960年に至る約15年間に様々なことが動きだしていたことが、大きなうねりの中で、伝統的なフランス系カナダが近代的なケベック社会へと変遷していった様子がありありと見てとれるのです。1945年、ミロンは17歳で、サクレクール修道会の修道士たちのもとで修業をしていました。それは1821年にフランスのリヨンで設立された修道会で、静かな革命以前のケベックではかなり広まっていた。第二次世界戦争が終わった頃、若いミロンはモンレアルか地方のいずれかの学校で教師を兼ねた修道士になろうとしていました。従って、彼はカトリックの聖職者がつく代表的な仕事である若者の教育にたずさわろうとしていました。ところが1947年、彼の歩みは逸脱し始めるのです。彼は宗教家となることを放棄します。ミロンは修道会を離れモンレアル大学の社会科学の授業を取り始めます。こうして彼は、当時の大部分の若者がそうしたように、自らの属する社会を批判的なまなざしで見ることが学ぼうとします。そしてその頃、若い世代の運動に参加しながら、決して暴力に訴えることなく、カトリック教会の権威主義的で階級的な考え方を、19世紀から続いてきたフランス系カナダのあり方を問い直そうとしたのでした。そしてついに、1953年に何人かの友人たちと小さな詩の出版社、レグザゴン社を設立します。こうして彼は、静かな革命において文化的で知的な高揚の中心的な役割を果たし、未来に向けてのケベックのアイデンティティを考察する場を準備したのです。

ミロンはまさに伝統的な世界から近代的な世界へと一気に駆け抜けていったのでした。しかし、ここで私はミロンの詩の世界を理解するのに、彼の世代において一般的ではなくとも、確固として中心にあった姿勢について述べようと思います。彼にあって、歴史的な進歩を前提とするこの旅は、過去との決別、古い世界の放棄、そしてケベコワにとってしばしば抑圧そのものであった宗教的要因の放棄を意味するものではありませんでした。後年、人生の終盤にいたるまで、彼は自分自身のことを好んで、皮肉を込めて「古めかしいミロン」と呼びならわしました。そして詩人としての仕事を「私は輓馬のごとく詩作に励む」<sup>4)</sup>と述べ、かつて、馬車馬に引かれて行われていたつらい農作業にたとえました。このことにはまた詳しく触れますが、当面、先に述べたように、静かな革命の、すなわちケベックを近代的な社会へと急激に変容させた主人公であった一人の詩人に宿っていた、一つの明らかな矛盾について指摘したいと思います。つまり、彼は進歩主義者であったと同時に伝統主義者でもあったのです！

結局、ミロンは1950年代から1960年代の間、その当時、発展途上にあつたすべての現代社会に共通す

る問題に直面していたと言えるでしょう。それは日本の皆さんにも通じることでありましょう。すなわち、一つの社会は、文化的統一性や集団的記憶を放棄せずに、あるいは祖先とのつながりを断ち切らずに、つまりケベックの最も優れた社会学者であるフェルナン・デュモンが「共通の価値」と呼ぶものを失わずに、どのようにいわゆる近代的な価値観（経済的、社会的、科学的な進歩、都会化、個人主義や自由消費の崇拜など）と関わっていくことができるかということです。

詩の歴史を知り尽くしていたミロンは、詩がどれだけ民衆にとって、創成し、結集させる神話的な契機となりうるかを知っていました。詩の中には、伝統と集団的な拠り所を維持していく力と、同時に、恐怖や、屈従や抑圧から解放されて、彼が「解放された未来」と呼ぶ、ケベックがあらゆる可能性を開花させる未来へと我々を押し出す力があることを見抜いていました。このように、詩には担うべき大きな使命と高い見識があったのです。しかし、古い世界から新しい世界へと、「大暗黒時代」から光明へと脱皮を成し遂げるには、詩、あるいは文学だけでは不十分で、まさに政治によって引き継がれ乗り越えられなければならないのです。

先に引用した『引き継がれた静かな革命』で、小説家で、エッセイスト、映画人でもあるジャック・ゴブーは、この問題について次のような問いかけをしています。すなわち「ケベック文学が静かな革命を生み出したのか？あるいは、静かな革命こそが、ケベック文学に民族文学としての息吹を吹き込んだのであろうか？」<sup>5)</sup>この質問はつまり、文学や芸術には歴史の流れを変える力があるのか、本当に現実を変えよう力をもつのかという問いかけでもあります。詩が社会を、あるいは世界を変えるなどというのは、うぬぼれた、幻想、幻影でしかないのでしょうか？ゴブーの答えは明らかに肯定的で、静かな革命の到来と躍進する原動力において、詩を含めた文学が創造的な役割を果たしたと信じています。そしてゴブーが、この変革の到来において、ガストン・ミロンが主人公であると述べたのは偶然ではありませんでした。そしてこれから私が検証したいと思うのは、その詩作品はもちろん、『寄せあつめの男』を上梓した詩人の出版者としての、政治的活動家としての側面も含めた、この中心人物の果たした役割であるのです。

\* \* \*

すでに述べたように、戦後、ガストン・ミロンは成年に達しました。その大著、『寄せあつめの男』の再版において、彼は1948年に遡るあるエピソードについて言及しています。その当時、ミロンは二十歳でした。昼は低賃金のアルバイトをしながら、夜は大学で学んでいました。文学、とりわけ詩をどん欲に読み漁っていたところ、ある日、本屋で、パトリス・ド・ラ・トゥール・デュ・ピンというフランス人作家の詩集に目が留まります。その1頁目には、「伝説をもたない国は／いつか寒さに凍え息絶えるであろう」<sup>6)</sup>という二行の言葉が書かれていました。若いミロンは、その言葉に衝撃を受け、強い啓示を受けます。この短い二行の言葉の何がそれほどまでに彼を突き動かしたのでしょうか？それは、フランス系カナダ人（その当時はまだ「ケベコワ」という名称は使われていませんでした）の状況そのものを言い表す言葉だったのです。実際、その社会は、衰退しかけていた人々は、大いなる集団的な物語を、自らを意味づける見通しを必要としていました。人々は、消滅の危機に、死の恐怖に直面していました。従って、「寒さに凍え息絶える」という表現は、ケベックあるいはカナダの文脈にあっては、とりわけ切迫した響きを持って訴えかけてきたのです。

「伝説」という言葉はとても重要です。その言葉には宗教的な響きが含まれています。なぜならカトリックの伝統のなかで、「伝説」とは長い間、市民に模範として語り伝えられた聖人の物語を指していたからです。一方で「伝説」はまた、英雄的で神秘的な人物像を通して、集団的な物語を語ることを意味し

ていました。19世紀、ミロンが現れるずっと以前に、「民族的詩人」として聖別された作家、ルイ・フレチェットは『民衆の伝説』を書き、1763年にイギリスがやってきて体制を終わらせるまでの、ヌーベル・フランスを代表する人物について書き連ねました。それは、ひどく理想化され賛美された過去への回帰をとまなう郷愁に満ちた「伝説」でした。一方、ミロンもいわゆる『民衆の伝説』を書きあげようとしたのですが、それは近代的でダイナミックな視野に立ち、未来に向けた可能性にみちたものでした。私たちはここに、伝統主義者と進歩主義者という二つの相反する次元を見出すことができるのです。しかし私たちは、先ほど引用したジャック・ゴブーの言葉の中に、萌芽的な直感を見出すことができるのですが、ミロンは、詩は独自のやり方で歴史を書くことができるだけでなく、神話的であると同時に予言的である力によって、潜在的に歴史を作ることができると考えているようでした。

さて、その当時(1940年代)ケベック、とりわけモントリオールでそれまでの歴史を批判的に検証し直そうという歴史学者の一派が台頭してきました。彼らはヌーベル・フランスそのものよりも、イギリスによる征服とその後の様々なフランス系カナダの変遷こそが、近代カナダの基を形づくったと考えました。彼らの大局的な見方によれば、フランス系カナダは、カナダの内部においてますますマイノリティとなりながら独自の道を歩み、自らの国をもち自己完結したかのように発展をとげていったと考えました。一方英語系カナダにおいても、この広大な国には「二つの孤独」が存在し、「二つの国」によって建設されたのだとする考え方が、とりわけ左派の社会民主主義者のなかで広まっていきました。

この分析による考え方は、非常に大きな影響力をもちました。一世紀近くの間、カナダ各地(あるいは北米)でのフランス系の人々は、フランス系カナダという一つのアイデンティティを形づくっていると見なされていました。しかし年代を経るにつれ、ケベック以外のフランス系は、その存在感が著しく衰退し、例えばオンタリオ州や、マニトバ州などでは、フランス語は愚弄されながら教育の場でかろうじて生き残っていきました。静かな革命に先立つ時代において、このように、ケベック以外の、あるいはケベックも含めた、フランス系カナダの脆弱さが、すなわち経済的な劣勢や文化的な未成熟が際立ってきたと言えるでしょう。そして実質的にその内部に二つの国が存在するというような、カナダへの批判的な考え方はすべての人に受け入れられていたとは言えませんが、「連邦主義者」を自認する人々においても、主要なフランス系としてのケベックの存在感はますます大きなものになっていきました。

若きガストン・ミロンが「伝説」、あるいは神話的で予言的な物語において着想したのは、この抑圧され、疎外され、植地的な状況のなかであえいでいるフランス系カナダの状況から脱皮して、ケベック固有のアイデンティティを立ち上げることにほかなりませんでした。ミロンの国、それは「ケベック、わが苦渋の大地、アーモンド香るわが大地よ」と謳われ、「アメリカの伴侶」「十月」といった政治をテーマにした代表的な詩編で「ケベックよ、勇敢なる母なる大地よ」と呼びかけられています。この詩で描かれる10月の赤は、秋の真っ赤に色づいたカエデとともに再起や復活を予告するロシア革命を喚起します。これらの詩の最初の草稿は1950年代に遡りますが、そこでの「革命」は決して「静かな」ものではなく、むしろ大なる「反乱」を予期させるものでした。問題となるのはもはや過去ではなく、理想に向かった未来だったのです。

\* \* \*

しかし、1948年、ミロンが二十歳の頃に、彼はあるフランス人の詩人から伝説的物語の着想を得たと言っていますが、このような解釈はいささか単純にすぎるかもしれません。実際、新しい国を創るという「伝説」は、本当に実現させるのに15年近くを要したのであり、彼が静かな革命が成し遂げられ、ケベックでのアイデンティティの礎が出来上がりつつあるのを見たのは、1959年から1961年までパリでの18

か月の滞在を終えてからでした。1948年の時点で、ミロンの政治的な意識はまだ萌し始めたばかりで、理想化された過去や罪悪感を帯びた信仰心を伴う古いフランス系カナダの保守主義からようやく抜け出そうとしていたのです。

その当時、彼が書いた詩は、「赤い10月」や熱情と愛着に溢れた「ケベックの土地」のような作品ではありませんでした。それらの詩はかなりありふれたもので、悲しみや無力な激高、「絶望の確かな地獄」<sup>7)</sup>について語っていました。この詩のなかで描かれたのは、「境界のかなたへ」彷徨う男、孤独で、愛にはぐれ、「取るに足りず、茫然とした男」<sup>8)</sup>の姿でした。若いミロンは、教師をかねた修道士となることを放棄し、貧乏で、神経質で、少し病的でした。憂さを晴らそうと入った若者のグループで友情が芽生えることがあっても、彼の人生に最も重要な何かが欠けていました。それは大いなる愛を分かち合い、家庭を築き、孤独や打ちひしがれた心を癒してくれる女性でした。

この作家が自らの詩的な声を見出したのは女性を通してであり、また、郷土のテーマと政治的共同体の意識が練り上げられていったのも、常に失敗に帰したとはいえ、彼の愛の体験を通してでありました。少しずつ「愛への行進」というフランス語で書かれた最も美しい現代詩が生まれるまでに、1952年から1962年までの十年あまりの間に、何人もの女性と、いくつもの愛の苦しみが必要でした。そしてその同じ時期に、寒さから身を引きはがし最も熱烈な人生へと移行しながら、見出された祖国のテーマが打ち出されていくのです。そして1960年から1966年の間に、静かな革命がそのピークを迎えるのです。

1996年に起きたミロンの死の数年後、私はミロンの伝記を執筆したいと思い、彼が愛した女性に会いたいと思いました。幸い、大部分の方々のご存命で、私は、彼女らが皆とても才気に富んで、教養があり、芸術や文学を愛する女性であることを知りました。最初の女性、イザベルとモンレアル大学の近くのカフェで1時間を限度に(なぜなら、彼女は半世紀近くも前の遠い時代に戻ることにあまり気乗りしないようだったからです)会った折、彼女が持ってきた書類を見て、私は喜びを隠せませんでした。彼女が持ってきたもののなかに、すっかり黄ばんでしまったタイプ打ちの紙があり、そこに書かれていた詩は見覚えのあるものでした。それは、詩集『寄せあつめの男』の詩編「愛の行進」の前奏曲として、「若い娘」という題で掲げられていた詩だったからです。その女性が私に見せたものには、「イザベルの伝説」という別のタイトルがつけられていました。私は大きな感動を覚えずにはいられませんでした。その気品をたたえた美しい70歳の女性は、かけがえのない青春の断片を私に見せてくれました。それはケベックで最も有名な詩人が彼女にあてた一片の詩であったのです。

さらにそこには、はっとする、どこかで見た記憶のある、古ぼけた「伝説」という言葉が記されていました。そして私はミロンの残した詩編など、他の様々な資料を検証して次のように確信するに至ったのです。すなわち、もちろんミロンが打ち建てようとしたのは「郷土の伝説」であったでしょう。しかしそれはもう一つの伝説、すなわち女性との愛の伝説の上に築かれ、練り上げられたものに他ならなかったのです。それはなぜであり、それらはどのように結びつくのでしょうか？それを理解するためには、ここでミロン自身よりも、ケベック社会(あるいはフランス系カナダ)そのものについて考察して見る必要があるでしょう。1945年から1960年に至る時代、ケベック社会に蔓延していたのは、慢性的な無気力であり、具体的な現実を受け止める力の欠如でした。確かにケベコワは、イギリス系の支配の中で生き残り、消滅は免れ、言語と最低限の生活習慣は保持することができました。しかし英語化への抵抗は、カトリック教会と高い出生率に支えられたもので、自ら創造する力はありませんでした。最も深刻な問題は、教育の制度にありました。発展していく近代に適応できず、抽象的で、現実と全く乖離してしまったあり方は批判的となりました。また一方で、数多くの文学者の意見として、その中でも最も力のある評論家であったジル・マルコットは、フランス系カナダ文学全般に、切実な愛への熱情の表現がほとんど見られないことは、このような社会の活力や具体性の欠如を反映しているのではないかと指摘

しました。

静かな革命の時代に、とりわけガストン・ミロンの世代の詩人たちに共通した顕著な特徴の一つは、女性や愛が中心的なテーマとなったことであり、この時代の詩人たちはこぞって愛する女性と郷土とを重ね合わせ一体化して謳いました。女性、それは再び見出された命であり、詩人ロラン・ジゲールが、1958年に発表した詩集『愛らしい雪女』のなかで「こんこんと湧き出る樹液よ」と謳い、1960年代始めには、詩人ポール・シャンベルランが「わが領土なる女性よ」と表現しました。ここには、自然なる女性、大地としての女性、そして豊穡の女神など、最も古い神話での女性をめぐる言説への呼応がみられます。その意味において、ミロンに触発されたシャンベルランが喚起する「わが大地なるケベック」で、具体的であると同時に、神話的な女性は重要な役割を果たしています。こうしてケベックにおいて、再生した人々をはじめて自らの身体を手に入れ、長い冬を生き延びた末に、生命力とエロスがほとぼしる春が訪れ、愛と創造への情熱のさなかで「大暗黒時代」の深い闇は消え失せていきました。

このような恋愛に関する大変革は西洋全体における性の解放運動の文脈とつながっています。この性の解放を通して、ケベックは、カトリックの伝統ときっぱり縁を切ろうとしたのです。カトリックの伝統は性について厳しく規制して、性に関することは出産のためだけの道具とみなし、神父と聖職者には禁欲（「貞操」）を要求したのです。このカトリックと性の問題はミロンが聖心修道会を辞めた主な理由の一つでもありました。ミロンは独身を貫いて、つまり女性と関係をもつ一般男性の性生活を諦めることはできないと感じていたのです。かなり多くの神父や修道士が、この時期にミロンと同じ道を選びました。このように静かな革命とは愛の革命であり、十全な性の解放を意味する革命でもあったのです。

とはいえ、ミロンにおいて事態はそれほど単純ではありませんでした。おそらくミロンの詩において、しばしば女性は自然に宿る生命力の強さそのものを、その全鼓動を具現する場合があります。イザベルとの出会いから10年後の1962年によく出版した詩集である「愛の行進」において、ミロンは愛した女性に語るのです。

君は野露のような青緑色の眼をしている  
 (…) 五月のそよ風にひそむ優しさを漂わせ

さらに

君の髪には柳の夜が宿り  
 偶然と果実で雪のように覆われた顔よ  
 隠された泉をたたえた眼差しよ  
 君の血管では何千もの虫の鳴き声がこだまし  
 君の愛撫では何千もの花びらの雨がふる<sup>9)</sup>

けれど、このような女性と自然との一体化、すなわち女性を郷土や国と大きな次元で一体化しようとするこの初歩的な手法をもって、ミロンの詩作品を駆り立てているもの、悲劇的な色合いすら感じさせるその詩に独特の緊張感を与えているものの正体を十分に明らかにしたとは言えないでしょう。ミロンの偉大な詩のタイトルが「愛の行進」であるのには理由があるのです。ミロンにおいて、女性との関係は、どうしても到達できない近い距離感を表します。つまり、遠く手の届かないような体験に他ならず、どれだけ歩み近づき続けてもうめられない距離が横たわる関係なのです。それはまたつらい喪失感を必死にうめるための再会の約束でもあるのです。

これこそが、「イザベルの伝説」という、ミロンの初恋だったこの女性によって保管され、私が2002年か2003年に興奮した気持ちで発見することになる詩であり、「愛の行進」の元々のタイトルなのです。この詩は「雪のように消え去った少女」に向けた詩で、自分の「長い孤独」にもどった男からの手紙です。この男の体には、もうしばし彼を潤したかもしれない雨の痕跡のような「愛の霧雨」しか残っていません。しかし今また雪がふり、冬が舞い戻ってきたのです。1952年にイザベルに書かれたもう一つ別の詩では、書簡体形式がより明白になっています：(« Je t'écris », *L'homme rapaillé*, p. 39)

君に手紙を書いている、愛していると言うために  
 毎日旅をするわたしの心が  
 ——名残りの雪のなかに旅立った心が  
 通りすがりの眼差しのなかに旅立った心が  
 まどろんだ空のなかに旅立った心が——  
 夜には、傷ついた獣のように舞い戻る<sup>10)</sup>

実は、傷ついた小鹿か変人のように、暗闇と寒さのなかを彷徨う狂った男を置き去りにしたのは、愛した女性その人だったのです。

愛した女性の伝説と郷土の伝説が出会うのはまさにこの点においてです。ついに約束した出会いがやっと果たされたことを述べる唯一無二の物語、すなわちマルチニックの作家エメ・セゼールが1947年に出版した有名な詩のタイトルを借りれば、「祖国への帰還」の約束がついに果たされたことを述べる物語が語られます。この「祖国への帰還」はケベックにおいて大きな共感をよび、とりわけミロンはそれに強く共鳴したのです。ただしこの「祖国」とは、ただ単に誇りを見出す場なのではありません。それは長い試練ののちに光と熱情をとり戻した再生の場であるのです。「どこかできっと君に出会うことになるよ／まったくもう！／わたしを腑抜けにして苦しめないでくれ」<sup>11)</sup>とミロンは「愛の行進」のなかで書いています。こうした苦しみや隔たりを早く終わりにしたいと思う言説は愛した女性に向けられたものですが、まったく同じくらい祖国にも向けられているのです。

ミロンの詩が持つ力強さは、彼自身の個人的な物語から集団的な運命を喚起する点にあります。そして、「未来の伝説」とミロンが呼んだ〈約束〉を出現させる点にあります。この約束は、ミロンの最も頻繁に引用される詩節の中にしばしばはっきりとあらわれています。「わたしは旅したことなど一度たりとない／おまえ以外の国に、わが祖国よ／いつかわたしは、自分が生まれたことを受け入れられる日がくるだろう」<sup>12)</sup>自分の住処と愛する女性を見つけ出すために生まれ故郷に戻るという物語は、『ユリシーズ』を想起させます。いわゆるアイルランド版の『オデュッセイア』を書いたジェームス・ジョイスとは異なるやり方で、ミロンは詩をとおしてケベック版『オデュッセイア』を練り上げました。そして自分自身の個人的な不幸や、恋愛の挫折の物語を重ね合わせ、苦難にみちたフランス系カナダの人々が、祖国に自らの生命の躍動を見出す神話的な物語を創り上げていったのです。ケベックのほかのどんな詩人よりも見事に、ミロンはこの「大暗黒時代」から「静かな革命」への移行を描き出しています。この「暗黒」とは、ミロンにおいて具体的で個人的なものと結びつきます。例えば、「わたしの頭には炸裂した闇がある」と自分を捨てた女性に打ち明けますが、この「闇」とは、まさにモンレアルの北のローランチッド地方の丘に住みついた先祖が抱えた闇でした。それは、不毛な土地に定住した読み書きのできないミロンの祖父の貧しさと文盲の闇でした。そして見い出され、再生した国の光とは、愛の光であるだけでなく、活力ある文化の光でもありました。それはまず何よりも十全で正当なあり方で言語を取り戻すことにありました。というのも1950年代において、フランス語のレヴェルは惨憺たるもので、ビジネスと商業分野

において英語が支配的である状況が増大していました、その結果、フランス系カナダ人は一方的にバイリンガルになることを強いられました。一方的にというのは、ケベックの少数派の英語系住民の側はフランス語を学ぶことを必要だと考えていなかったからです。そのようなわけで、1947年にモンREALにやってきたミロンは、有名な詩の一つで、モンREALの主要な商業通りを英語風に皮肉をこめて、「立派なサン＝カトリーヌ・ストリート」と表現しました。

\* \* \*

『寄せあつめの男』は、文字通り断片が寄せ集められた人間と言う意味ですが、ミロンの詩的創作物のほとんどすべてが含まれているという意味でも、独特の本です。その本はミロンの50年間にわたる創作行為のなかで、何度も手を加えられ、推敲され増幅していった本なのです。本の分量はここでは評価基準にはならないでしょう、というのは、ミロンの全作品よりも寡作であった著名な詩人というのはいくらでも存在するからです。例えば、フランスのヴィヨン、ボードレール、ランボー、アメリカ合衆国のワルト・ホイットマンなどが思いつくでしょう。いずれにせよ、『寄せあつめの男』を書いた詩人、いわば神話と伝説の創造者であるこの作家において印象的なのは、彼の現実感覚と実用主義です。集団的な神話の執筆を計画していたにもかかわらず、ミロンは詩がもつ政治的な影響力を過信することはなく、どれほど詩が力強いものであったとしても、詩を書くことだけで、一つの文化およびナショナル・アイデンティティを十分に構築することができるとは考えていませんでした。

1952～53年に「イザベルの伝説」、つまり「郷土」の伝説を予告する作品を書いている時期に、ミロンは他の仕事にも追われていました。時々大学の夜間授業で出会った人達や友人たちとともに、若者の政治的運動にとっても深く関わっていました。その運動は、自然との触れ合いを促し、フランス系カナダの伝統的な歌や踊りを廃らせず活性化しようと働きかけるものでした。そこには、とりわけ映画によってアメリカ文化がケベックや世界の他の地域に多大な影響を及ぼしていたという背景があります。これらの運動に関わった若者には詩人や芸術家がありました。そして、1953年に彼らは一冊の詩集の出版と、その本を出版するために自分たちの出版社、エゴザゴヌ社（フランス国家を意味するのではなく、彼らが6人だったという事実による！）の立ち上げを決意します。最初に出版したこの本に含まれていたのが、ミロンと彼の友人オリヴィエ・マルシャンの詩数点でした<sup>13)</sup>。ミロンは『寄せあつめの男』の中でそうした詩の何点かを再収録しています。

こうした出来事はありふれたことかもしれません。世界の至るところで、若い詩人たちは自前で前衛的な雑誌または出版社を立ち上げました。なぜなら、既存の出版社は保守的で、台頭する世代にほとんど開放されていなかったからです。それが1953年でのエゴザゴヌ社の若い詩人たちに起きた事態だったのです。例えば、出版社は彼らの新しい作品をいつも門前払いするか、自分で出版費を払うよう要求していました。全般的に、1945年のガブリエル・ロワの『束の間の幸福』の大成功にもかかわらず、文芸出版には活力はありませんでした。それに本の市場は、カトリック系の出版社とパリに本社をおくフランスの出版社や配給会社によって占められていました。

この点について、ミロンと彼と同世代の若者たちを静かな革命へと導くことになった社会的、文化的な変動のもう一つの本質的な要因に言及する必要があるでしょう。実は問題となっていたのは、ケベックとカナダの関係だけでなく、ケベックとフランスとの関係も検証されるべき対象だったのです。1世紀前から、フランス系カナダ人の「母なる祖国」に対する関係は両義的でした。一方では、たしかにヌーベル・フランスの理想化が暗示するように、そこには、自分たちはアメリカ大陸に進出したフランスであり、自分たちはフランス文化の一翼を担い、フランス文明を伝達する責務さえ担っているとの自負が

ありました。けれども他方では、思想家や作家たちはフランス人であるよりもカナダ人であると主張し、感受性、生活習慣、言語を引き合いに出して、フランスとは異なる自分たちの特性を強調していきました。1945年以降優勢になっていくのは、この第二の見解、つまり本質的な違いに基づく見方であり、ミロン自身、成人した時に、しっかりとそれを自覚していました。自分たちはフランス語で話し書く、けれどもメキシコ人やチリ人がアメリカ大陸のスペイン人ではないのと同様に自分たちはフランス人ではないのである。言葉は間違いなく共有の資源であり、共通の文化的、文学的記憶を形成します。しかし、自立した文学が、「母なる祖国」との断絶や少なくともそのずれを表現しながら、アメリカ大陸の北からカリブ海を経て大陸の南に至るまで出現していきました。1957年の重要なテキストのなかで、ミロンはその例としてメキシコとチリをあげ、現代ケベックでは「詩の近代化運動」が巻き起こり、「文化全般においても著しい進歩が起きている」<sup>14)</sup>と主張しました。

この変化においてエグザゴヌ社の役割は目を見張るものでした。当初、詩のためのこの出版社の設立はそれほど目新しいことでも、注目されることでもないと思われていました。ところが、数年の後、ミロンと友人たちとの献身的な努力により、エグザゴヌ社は新興の詩の出版にとって欠くことのできない場となり、静かな革命の知識人にとっての中心地の一つとなっていくのです。それはとりわけ、1959年に創立した重要な雑誌『リベルテ』にも依拠していました。『リベルテ』は、今日の講演の冒頭で言及したジャック・ゴブーと数人の詩人と思想家たちが現代ケベックの文化とアイデンティティの問題について様々な検証を行った雑誌です。

エグザゴヌ社の成功の要因は、注目すべき組織感覚、若く素晴らしい詩人たちの採用、新しい動向を一般読者に幅広く開こうとしたこと、広告と配給の絶妙なセンスなどに寄るでしょう。ミロンは有能な協力者たちに恵まれましたが、エグザゴヌ社を成功に導いた中心的な人物とは、人間関係を切り結ぶ能力にだけ卓越した言説をもつ、ミロン自身に他なりません。この側面において、ミロンは全く別人の様です。すなわち、寒さのなかで愛を求めて彷徨う男、「ごつごつとした岩の思考にしみついた生まれながらの貧しさ」を語った詩人、自らの言語と祖国から追放された者、これらミロンの詩にあらわれた全ての人物像は、現実を変革せんと行動に身を投じた人間に取って代わられたのです。ミロンがジャーナリストから受けたインタビューや記事で語っているように、エグザゴヌ社はミロンにとって、自らの独自性と真正なる正統性を備えたナショナルな文化を創造するための、真に共同体的な企てとなったのでした。

こうした活動がもたらした重要な影響は、ケベックとフランスとの関係に現れてきました。つまり、生涯にわたってずっと、ミロンはケベックの特異性を主張していくのですが、それは二つのネイションの間でより平等な関係を築きたいという思いと、フランス系カナダを長い間悩ませてきた文化的な従属状態と劣等感に終止符をうちたいという強い思いがあったからなのです。もちろん、ケベックとフランスの二つの民と二つの文化の差異は対等な関係となるには大きすぎました。しかし、ミロンの出版社は活動初期から、新興のケベック詩をフランスでも知らしめるため、フランスの作家（ルネ・シャールのような高名な作家たち）や批評家たちとの交流関係を築いていきます。ミロン自身も、1959～61年のパリ滞在中、フランスの詩人や知識人と出会い、雑誌『エスプリ』グループと親交を深めています。この雑誌は、戦後、アフリカを始めとする脱植民地運動に共感し、現代ケベックの創造的な熱狂にも関心を寄せていました。フランスの詩人で批評家のアラン・ボスケは、私たちケベックの詩をアンソロジーとしてまとめあげています。1962年にパリで発表された初版のタイトルは「カナダの詩」でしたが、5年後の改訂版では「ケベックの詩」となっています。この改訂版はミロンの友人たちに捧げられ、ミロン自身は編集者として謝辞を受け、アンソロジーの中には彼のいくつかの重要な詩が収録されています。そこに収録された詩の一つ「悲しみの遺産」には次のような一節があります：「彼はこの国にたったひとり、雪と、

岩とともにある／生来の日の光が決して届かなかった国に」。寒さと闇のさなかでの孤独を語りながら、今や時代は変わり、果たされるべき約束としての「郷土の伝説」が予言されているかのようです。

\* \* \*

詩的な想像力の次元であれ出版活動であれ、ミロンが一貫した計画をもっていたのは明らかです。それはすなわち、自らの民が自分たち自身を具現できる状況を彼らに与えること、彼らが声を発し、創造し、行動に移すことのできる力を見出すことにありました。1961年の初頭にミロンがパリから戻ったとき、大きな政治的、社会的変革が起きて、小説と詩の双方において文学が目覚ましい飛躍を迎えていました。一方、ミロンの友人でもあるピエール・ペローのような映画人が、ケベックを駆け巡っていました。1960年代の主要な詩人たちはエグザゴヌ社に集い、ケベックという国を地理的な観点から探求し、近代のケベックの人々の記憶や夢を表現しました。彼らは、20世紀初頭に大変懸念されるようになった暴力や核兵器の脅威も含めて、現代世界を揺るがせていたものを目の当たりにしながら訴えたのです。静かな革命がある面では文学革命であることに疑いはないのです。

とはいえ、驚くべき矛盾が存在しました。ケベックにおける最も重要な詩の出版社の創設者であるミロンは本を出版してはいませんでした。1953年にエグザゴヌ社が出版した最初の本に15点ほどの詩を載せて以来、ミロンは雑誌や新聞にしか作品を発表していないのです。奇跡的だったのは、このように断片的に発表された作品だけでもミロンが有名になるには十分であったし、1963年以降、ミロンはジャーナリストから「ケベックの国民的詩人」として称されるほどになったのです！実際に、ミロンは自分の詩作品にたゆまず手を加えながら、様々な方面で率先して力を尽くしていきました。ミロンには人々を感化する力がありました。彼は、作家の会談に参加し、他の出版社と協力して本の普及活動に関わり（フランクフルトのブック・フェアに毎年代表者として参加）、先述した1959年創刊の当時最も重要な雑誌グループ『リベルテ』や、マルクス主義とアフリカで起きた脱植民地運動のほかアメリカ大陸の黒人問題からも影響を受けて創刊した雑誌『パルティ・プリ』のメンバーとも交流がありました。またこの時期からミロンは、カナダからの完全な独立を目指す手段として、ケベックの主権を追求する政治的運動を強く支持するようになります。1970年に『寄せあつめの男』がついに出版されると、ミロンは名声を手に入れました。そして彼の著書のなかに真なる国の実現の兆しを見る者もいました。その希求は、ほどなく政権につくことになるケベック党という、政治政党によって引き継がれていきます。

その後については会場の皆さんもご存知でしょう。1980年と1995年に続けて2回の州民投票が行われ、独立運動は失敗に終わりました。しかしながら、この（おそらく決定的な）失敗をとおして、1948年以降ミロンが作品の中で問うた「郷土の伝説」は果たされなかった約束であり、単なる幻影であったと結論づけることは全くの誤りだと言えるでしょう。その理由は、ミロンと彼の同世代の人たちが名付けたケベックは、カナダにおいても世界においてもしっかりと存在しているからです。AJEQのような「ケベック研究」の学会もそれを証言しています。ここではより詳しい説明をする時間はありませんが、第二次世界大戦後、そして若きミロンの詩的な試みがなされて以来、ケベックがあらゆる分野で大きく発展したことは否定できない事実です。

けれど、この詩人の成功は何より純粋に詩的なものです。たしかに『寄せあつめの男』は空間と時間のうちに位置づけられた特異な文化を表しています。しかし、同書はもっと大きな神話的、普遍的な力にも支えられているのです。先に、母国に戻るというギリシア神話のユリシーズについてお話しましたが、ミロンの詩作品が内包するもう一つの偉大な神話とは、救済と復活の物語です。キリスト教的な単語がミロンの作品には数多く見られ、さらにミロンは、「たったひとりの祖国」はどこかで「魂の救済」を待ち

Mar. 2021

ガストン・ミロン、ケベック詩と〈静かな革命〉

わびていると書いています。

ミロンの苦しみは、愛を失った者の苦しみであると同時に抑圧されたフランス系カナダ人の苦悩なのです。それは、光あるところへと、新しい生命へと向かう道のりなのです。またこの道のりには、キリストの死に象徴されるように、新たな人間が生まれるために必要な死を語る物語があるのです。これは、ミロンの別の有名な詩の一節でも確認できます。「私たちは創るのだ、ケベックの地よ、復活の〈褥<sup>しよね</sup>〉を。」

もう少し大胆な解釈をして本講演をしめくりたいと思います。ミロンの詩は、身体と大地に根ざした具現化した言葉として、ケベック史における救世主の到来を啓示しているのかもしれませんが。救世主は、実際に、ユダヤ人にとっては未だ現れていない存在であり、現れないままである存在です。けれども、果てしなく待ちつづける間に、歴史的時間と文化的な世界は生じてきました。「郷土の伝説」、つまりミロンが企てた「未来の伝説」もケベックの歴史に同様に働きかけているのです。伝説は失敗ではなく、絶えず繰り返されていく約束、またはもしかしたら実現不可能な約束であるかもしれませんが。しかしこの伝説によってこそ、我々は支えられ、唯一無比のあり方でこの世界に存在し発展し、時の流れのなかで文化を創造していくのです。

#### 注

- 1) 本稿は、2017年10月に早稲田大学で開催された日本ケベック学会全国大会にゲストスピーカーとして招かれ、講演を行ったケベックの詩人、批評家であるピエール・ヌヴェー氏のフランス語による講演、Gaston Miron, la poésie québécoise et la Révolution tranquille, の全訳である。フランス語による講演原稿は『ケベック研究第10号』（2018年9月、日本ケベック学会）に収録されている。日本語への翻訳については、ヌヴェー氏本人より許諾を得ている。訳出にあたって、ガストン・ミロンの詩については立花英裕早稲田大学名誉教授より多数のご教示を頂いた。佐々木業緒さん（明治大学大学院）には翻訳補助でお世話になった。
- 2) Guy Berthiaume et Claude Corbo (dir.), *La Révolution tranquille en héritage*, collectif, Montréal, Boréal, 2011.
- 3) Roland Giguère, « La main du bourreau finit toujours par pourrir » (1951), *L'âge de la parole, poèmes 1949-1960*, Montréal, Éditions de l'Hexagone, 1965, p. 17.
- 4) Gaston Miron, « Paris », *L'homme rapaillé*, Montréal, Typo, 1998, p. 146.
- 5) Jacques Godbout, « Postface. Du politique au politique », *La Révolution tranquille en héritage*, p. 271.
- 6) Cité par Gaston Miron, *L'homme rapaillé*, Montréal, L'Hexagone, 1994, p. 32.
- 7) « 19 ans », dans Olivier Marchand et Gaston Miron, *Deux sangs*, Montréal, L'Hexagone, 1953, p. 57.
- 8) « Les bras solitaires », *ibid.*, p. 55 et 56.
- 9) « La marche à l'amour », *L'homme rapaillé*, p. 59 et p. 61.
- 10) « Je t'écris », *L'homme rapaillé*, p. 39.
- 11) « La marche à l'amour », *ibid.*, p. 60.
- 12) « Pour mon rapatriement », *ibid.*, p. 87.
- 13) Olivier Marchand et Gaston Miron, *Deux sangs*, Montréal, Éditions de l'Hexagone, 1953.
- 14) « Situation de notre poésie » (1957), *Un long chemin, Proses 1953-1996*, Montréal, L'Hexagone, 2004, p. 27.

